

# 皇女の結婚

源氏物語主題論の一節

森 一郎

宿木卷で帝が薫の人物を見込み女二の宮を託そうとされるお気持を叙すくだりに「朱雀院の姫宮を、六条院にゆづりきこえ給ひし折の定めどもなど、おほしめし出づるに、しばしは、いでや飽かずもあるかな、さらでもおほしなまし、ときこゆる事どもありしかど」(日本古典全書宿木卷一三五頁。以下、頁数は同書による)という一節がある。この一節によると、朱雀院の女三の宮が六条の院に御降嫁されることについて当時東宮であった帝が反対したというように受取られる。「しばしは、いでや飽かずもあるかな、さらでもおほしなまし」とはまさに明白な反対表明というよりほかないであろう。ではなぜ東宮(現在の帝)は当時反対されたのであろうか。この問題は、光源氏への降嫁反対の理由の追究ということにおもむきがちなのであるが、わたくしはそうではなく降嫁反対、つまり皇女の結婚反対のお気持の表明なのであって、決して光源氏反対の表明なのではないという結論から先に申し上げたい。

その理由の第一は、この一節の直前の「かやうなる御さまを見知りぬべからむ人の、もてはやしきこえむも、なかはあらむ」とあって内親王の美質を解し、賞讃しうる男はめつたにおるものでないという、内親王の礼讃であり、それに比肩しうる男を見つけることの至難、ゆえに内親王の結婚は考えにくい、という皇女尊崇による皇女独身論なのであるということである。これは直接には女二の宮の「御答<sup>いへ</sup>なども、おほどかなるものからいはけなからず、うちきこえさせ給ふ」(宿木卷一三四頁)という人柄に対する礼讃であるにちがいないが、続けて朱雀院の姫宮(女三の宮)の降嫁について「しばしは、いでや飽かずもあるかな、さらでもおほしなまし、ときこゆる事どもありしかど」(同一三五頁)と回想されていく連関性は内親王ということではなければならない。朱雀院の女三の宮が「おのづから人に軽められ給ふ事もやあらまし」と懸念される不安な人柄であることがその事を傍証するであろう。すぐれた人柄、可憐な今上の女二の宮に比肩しうる男がめつたにあるまいということは内親王を基底とする話でなければならないのである。単に人柄のすぐれた娘だから比肩しうる男がめつたにあるまいということではないのである。玉上琢彌博士が『源氏物語評釈』第十一卷九六頁で「内親王ゆえ結婚は考えにくい」と結婚を帝は否定している、と解されている通りである。その文脈からして、女三の宮の結婚についての過去回想もその線上のもので、「いでや飽かずもあるかな、さらでもおほしなまし」は皇女独身を基本精神とする女三の宮結婚への慨嘆

なのであった。「飽かずもあるかな」とは、光源氏が不足ということなのではない。光源氏は臣下に降ったとはいえ当時准太上天皇であつたから身分の上で不足とは考えられない。光源氏その人の人物に不足があるなどはそれ以上に考えられない。色好み、多妻という点に不安を持たれたのは、その人物の偉大性に収斂され、朱雀院は光源氏の偉大性に魅せられていた。身分、人物共に不足ない光源氏なればこそ最愛の姫宮を託したのであつた。その事は若菜上巻の婿えらびの経緯に明らかである。

現在の帝、当時の東宮の言葉「さしあたりたる只今のことよりも、後の世の例ともなるべき事なるを、よく思召しめぐらすべき事なり。人柄よろしとて、ただ人は限あるを、なほしか思し立つことならば、かの六条の院にこそ、親さまに譲り聞えさせ給はめ」(若菜上巻三二頁)は、玉上博士が「源氏物語評釈」第十一卷九六頁で一解として示されたように「よく思しめぐらすべき事なり」が主旨で、どうしても結婚さすなら「なほしか思し立つことならば」六条の院に、というのが東宮の見解であつたのだ。「さしあたりたる只今のことよりも、後の世の例ともなるべき事なるを」(若菜上巻三二頁)という、それほどに皇女の結婚は重大に慎重に考えられねばならぬこと、只今の都合に迫られて軽々しく結婚させてはならないという「よく思し召しめぐらすべき事なり」との慎重論が根幹にあるのだ。「なほしか思し立つことならば」「どうしても結婚さすというのなら、六条の院にというのである。結婚させるとすれば六条の院が最高というのであつて、結婚させるといふことが妥協案なのであり、妥協案での最高案が六条の院にということであつたのだ。

決して六条の院にということが妥協案であつたのではない。「ただ人は限あるを」の「を」は順接である。六条の院は准太上天皇であつてただ人ではない。朱雀院は「ただ人の中にはあり難し」(若菜上巻二三頁)と仰せられていた。

皇女の結婚の有様が後の世までの例としてその幸、不幸が問題になるといふ言ひ方には、本来皇女は独身であるべきものという前提があるからであらう。本来のあり方、原則とでもいふべき独身が不安でなく可能なら問題とすることはないが、どうしても結婚させるとするならば、後々の世の事例の一つになるだけに事は慎重を要するといふ言ひ方が出てくるのであらう。皇女の結婚といふことがやむをえない事情などにもとづく、原則外の事例として考えられていた事情をうかがい知らねばならない。朱雀院の女三の宮のばあいも女三の宮に婿を求めねばならぬ事情があつたからで、他の皇女は「後見などあるは、さる方にも思ひゆづり侍り」(若菜上巻一七頁)とある。この「後見」とは婿ではなく、後楯となる母方の勢力者のことである。そういう皇女たちにも朱雀院は何かと御心にかけてやつてほしいと東宮に頼んでいられる。

女三の宮のばあいは、「後見などある」皇女たちのように東宮に御心にかけてもらうだけでは足りないもの、不安なものがあつた。しっかりと母方の後見がないのに加えて宮が未成熟な御人柄であつたからである。そして朱雀院の病弱による出家という事情が事柄を緊急なものとしているのであつた。「今はと背きすて、山籠しなむ後の世にたちとまりて、誰を頼むかかげにてもし給はむとすらむと、ただこの御事をうしろめたく思し歎く」(若菜上巻一六頁)と

いふ事情が女三の宮の結婚を必然化するものとしてあるのである。

女三の宮の乳母の言葉の中に「御子達はひとりおはしますこそは例のことなれど」(若菜上巻二四頁)とあるし、朱雀院の御言葉に「御子達の世づきたる有様は、うたてあははしきやうにもあり、また高き際といへども、女は男に見ゆるにつけてこそ、悔しげなる事も、めざましき思も自らうち交るわざなめれと、且は心苦しく思ひ乱るるを」(若菜上巻二七頁)と皇女の結婚に不本意なお気持を表白していられる。が、「またさるべき人にたち後れて、頼む蔭どもに別れぬる後、心を立てて世の中に過ぎむことも」当今の好色的現実を照して不安きわまりないのであった。「今の世には、すぎずきしく乱りがはしき事も、類に触れて聞ゆめりかし。昨日まで高き親の家に崇められかしづかれし人の女の、今日はなほはほしく下れる際のすきものどもに名を立ち欺かれて、なき親の面を伏せ、影をはづかしむる類多く聞ゆる」(若菜上巻二七頁〜二八頁)好色的現実を院は深く憂えていられる。高き際の女がすきものどもにあざむかれる、そういう不安は「宿世などいふなることは、知り難きわざなれば、よろづに後めたくなむ」(若菜上巻二八)という女の宿世の問題として命題化され、さきに「女は心より外に、あはあはしく、人に貶しめらるる宿世あるなむ、いと口惜しく悲しき」(若菜上巻一七頁)と朱雀院の吐露された女の宿世の命題に収斂していくものであったので、その不安が女三の宮の結婚の必然化へとかり立てていくものであった事情がもはや分明きわまりないであろう。

朱雀院の病弱による出家の決意、女三の宮の幼稚な人柄、母方のしつかりした後見のないこと、当今の好色的現実という諸条件に迫

いつめられて不本意ながら宮の結婚を考慮せざるをえないのであった。もしこれらの諸条件がゆるめうるものならば、心ずしも女三の宮の結婚の必要性は朱雀院の側の事情として必然化しなかったであろう。たとえば朱雀院が御健勝で出家なさらないのであれば少くともあわてて宮の結婚を考えることはないのであった。また母方の後見にすっかりした人がいればそれに託して院は安心して出家しえたであろうかもしれない。宮の幼稚さは結婚しても不安、しなくとも不安という性質のものであったから、結婚は必ずしも不安を防ぎとめうる唯一の方法ではなかった。東宮が「かの六条の院にこそ、親さまに譲り聞えさせ給はめ」と朱雀院に進言したゆえんがここにある。光源氏は朱雀院の不安を肩代りさせられたのである。そういう事情が朱雀院の側にあるなどは源氏は思ってもみなかった。彼は宮に藤壺の面影を求めていた。

女三の宮の側の秘められたる不安と源氏の永遠の恋の情念との契合によって宮の降嫁は成った。あやういロマンスクなのであった。結婚ということがかくして文学的な命題として人生の深淵をのぞかしめるものとなる経緯をわれわれは看取するであろう。皇女の結婚がこのように負の条件の積み重ねの上に成り立つものであることを見た。この事情は女三の宮に限られたことなのであるうか。女三の宮なる人物が作者の命題をになった一つの文学的典型なることは言うを俟たない。文学的典型なるがゆえの特別な場合という感触はうべなわれはするが、それは皇女の結婚の悲劇という基底をうべなうものでなければならぬ。

皇女の結婚ということは皇女の側からすれば余儀ない仕儀なのであった。女三の宮の姉、女二の宮と柏木の結婚も柏木の父の懇望にほだされてやむなくおゆるしになったものであった。「はじめより母御息所は、をさをさ心ゆき給はざりしを、この大臣のあたちねんごろに聞え給ひて、志深かりしに負け給ひて、院にもいかがはせむと思しゆるしける」(柏木卷二四〇頁)。母御息所は心の納得の不分なままやむなくであった。御息所は内親王の結婚というものに反対なのであった。「御子たちは、おぼろげのことならで、あしくもよくも、かやうに世つぎ給ふことは、え心にくからぬことなりと、古めき心には思ひ侍りし」(柏木卷二五六頁)と夕霧に語っている。朱雀院も「いかがはせむ」、いたしかたないと、柏木の父の熱望に負けなさってやむなくおゆるしになったのである。

柏木は、前太政大臣の嫡男であり、下臈の更衣腹の女二の宮には不満であり多少軽んずる気持であったのである。柏木の父が熱望し柏木も不満ながらも望んだのは宮が皇女であるからである。より正確な内実をいえば、熱望する女三の宮への恋のとげられぬ悩みに堪えかねてその姉の女二の宮の御降嫁をねがったのである。柏木はもとも、その父の言葉にあるように「御子達ならずば得じ」(若菜上卷三〇頁)と違って独身を通してきた男であった。この強い皇女願望は皇女という高貴性に対するあこがれに発しているがゆえに朱雀院最愛の皇女であり、先帝の皇女を母とする女三の宮への強い恋慕となったのである。女二の宮に対して「下臈の更衣腹におはしま

しければ心やすき方まじりて、思ひ聞え給へり」(若菜下卷一六九頁)とするところに柏木の皇女願望が限りない高貴性へのそれであることが分る。皇女であるがゆえに一応満足しつつも女三の宮に比して高貴性に遜色のある女二の宮に心傾けえないのである。

皇女願望が高貴性に対する強いあこがれであることは、薫が今上の女二の宮との結婚に心進まず(それは心の底に宇治の大君への追慕の情が強いからだ)が、いままさら結婚するのは僧が還俗する気持だともまで思いながら、また「今上の女二の宮ほどの皇女なら」ことさらに心をつくす人だにこそあなれ、とは思ひながら、后腹におはせばしも」(宿木卷一三七頁)と願望していることからよく分るのである。そして光源氏の御子として理想の男性と目されている薫でさえも「后腹におはせばしも」という願望は「あまりおほけなかりける」と批判されねばならないことなのであった。このことは注目し値する。

「あまりおほけなかりける」は語り手の批判のことばと考えられるが、あるいは薫の自己批判のことばであるかもしれない。それほど后腹の皇女とは薫のような当代の理想的男性ですら高嶺の花であり、手のとどかぬ存在であったのだ。ということは薫が皇女の配偶者として物足りない存在だということではないのである。帝が女二の宮の結婚の相手として「この中納言よりほかに、よろしかるべき人、またなかりけり。宮達の御かたはらにさしならべたらむに、何ごともめざましくはあらじを」(宿木卷一三五頁)と、お認めになつている。皇女達の配偶者として何一つ不都合ではないと認められているのである。ゆえに后腹の皇女を願望するのが「あまりおほけ

なかりける」というのは、后腹の皇女の高貴性が結婚を本来的に否定する存在であることを証しているのだと言えよう。例えば明石中宮腹女一の宮は悠々として清らかに皇女独身の神聖を保持して、世づくことによる軽卒さをまじえぬ生き方をしていられる。薫はこの女一の宮にあこがれているが薫のような理想の男性と目されている人物でも結婚がかなわぬのは薫のせいではなく、女一の宮が皇女本来の独身を悠々と清らかに生きていられるからであって、所詮結婚の対象でないからであつた。ここにも望んでかなわぬ、いわば不毛の恋に心を尽くす薫の生きざまが露呈されているというのが正しいのである。

すでに引いたように皇女の結婚は「うたてあはあはしきやうにもあり、また高き際といへども、女は男に見ゆるにつけてこそ、悔しげなる事も、めざましき思も自らうちまじるわざなめれ」（若菜上巻二七頁）と朱雀院は仰せられている。皇女の結婚は本来望ましくなく、結婚は余儀ない事情の皇女について考えられているようである。一方、皇女を望む側からすると皇女との結婚は非常な至福であつたようで、特に帝在位中の盛りの御代の皇女との結婚は少かつたようである。薫と女二の宮の結婚について夕霧は「めづらしかりける人の御おぼえ宿世なり。故院だに、朱雀院の御末にならせ給ひて、今はとやつし給ひし際にこそ、かの母宮を得奉り給ひしか。われはまして、人もゆるさぬものを、拾ひたりしや」（宿木巻二一四）と言っているのである。さきの柏木の強烈な皇女願望や、光源氏ですら朱雀院（上皇）の晩年の出家の際に皇女を得たし、夕霧は人も認めない無理な恋の末にやっと得たという事情であり、薫だけが帝在

位中の婿となつたということが「めづらしかりける人の御おぼえ宿世なり」と羨望されているのである。

柏木、光源氏、夕霧、薫それぞれについて皇女の側には言いようもない悲劇性が秘められていたのであつて、柏木と結婚した女二の宮のばあいは、その結婚は、秘められた柏木の女三の宮への恋慕の波紋によるものであつて、夫のそのような秘事は結婚後もよそよそしい外面的のみにとりつくりう愛となり、あげくの果は女三の宮との密通事件とその露顕による夫の非業の死によつて未亡人となる不幸な結婚であつた。しかも女二の宮は夫の秘事を知らず、ただ己の容姿の劣れるがゆえとのみ劣等感を抱く。やがて夫の親友夕霧の恋慕を受けて世間の非難と母御息所の死をもたす苦しみに悩まねばならなかつた。光源氏と結婚した朱雀院の女三の宮の悲劇性はあまりにも明白である。薫と結婚した今上の女二の宮はそれほど悲劇性が主題化されていないけれど、白き羅の女一の宮を垣間見た薫が妻の女二の宮に羅の単を着せ、心ひそかに明石中宮腹の女一の宮と見くらべて、女一の宮への思慕の情を感えているなど、客観的に言つて女二の宮の不幸が描かれていると言えよう。物語の構想としてその不幸を進展せしめる余地はあるのである。

### 三

若菜巻に始発した女の宿世の命題は具体的には内親王の結婚問題であり、その悲劇は負の人としての朱雀院の皇女に具体化されることによつて進められた。

内親王の結婚について今井源衛氏は「平安朝初頭より一条期以前

までの皇女数と、その中の有配偶者数一覽」を作成され、歴史的事実の実証的な調査にもとづく貴重な考察を加えていられる。氏の御調査・御考察に導かれると、内親王の降嫁は醍醐朝に入つて急増するが全体としては少なく、令制に謳われた皇族の矜りとして皇女独身が保たれたことが分る。今井氏の御指摘にあるように、そのような皇女独身論は、落葉宮の母御息所自らのことばのごとく「古めき心」（柏木巻二五六頁）であつた。朱雀院、一条御息所にふさわしいことばであつた。その保守的な思想、觀念の持主である彼等が、朱雀院の分析にあるように当今の好色の乱世をおもんばかつてそれに屈従するかのごとく女三の宮の降嫁を決める。宮の幼稚さが皇女独身の好色の乱世にもてあそばされる恐怖・不安をかき立てたことすでに述べた。それでも院も東宮も光源氏が「ただ人」でないことをもつて第一の候補条件としている。天皇妃に準ずる准太上天皇妃としての面目にこだわつたのである。「なほしか思し立つことならば」という東宮のことばには皇女の結婚に対する基本的なためらいが重苦しくたゞよっている。宿木巻の「しばしは、いでや飽かずもあるかな、さらでもおはしなまし、ときこゆる事どもありしかど」という今上の御言葉はいつそう分明にその氣持を明らかにすることによつて若菜巻の當時の東宮の御言葉と符合しているのである。

女三の宮のばあい、朱雀院がその本来の思想や觀念を自ら屈従させてまで源氏への降嫁にふみきつた経緯はすでに述べたごとく作者の周到につき重ねた、ぬきさしならない諸条件によるものであり、いかに余儀ないものであつたかが描かれていた。黄礼讃、今上の女二の宮の婿としての第一候補たることを述べるためのくだりである

宿木巻の今上の述思は、不本意であつた女三の宮の結婚も、源中納言（薫）のおかげで幼稚な女三の宮が尊貴を保持しえているのだとさかのぼつては女三の宮の結婚も肯つていられるのだ。

朱雀院の女二の宮の柏木との結婚は今井氏の御考説に導かれるとき、まさに藤原摂関体制の進展のための皇女独身の崩壊現象である。院も母一条御息所も藤原氏の力（柏木の父の懇望）に押し切られていったのである。後に女二の宮は未亡人となつてから夕霧の恋慕を受け困惑するが、一泊して小野の山荘を出ていく夕霧を目撃した律師のことばは痛烈に藤原氏の権門としての実力をあげつらい、内親王である宮もそれを抑えることはできないであろうと言いつている。「本妻強くものし給ふ。さる時にあへる族類にて、いとやむごとなし。若君達は七八人になり給ひぬ。え皇女の君おし給はじ。」（夕霧巻三四頁）。

宇治の八の宮の姫君たちの結婚問題はよりいっそう無慘であつた。これも皇胤の姫君たちの悲劇であり、大君の結婚しえない悲劇中君の結婚生活の幸福と不幸、浮舟の悲劇の意味についてはすでに論じているのでくりかえさないが、皇胤であるこれらの姫君たちは薫の侍女となつていゝる人々と優劣つけがたい階層に没落している。「時世にしたがひつとおとろへて」（宿木巻一四五頁）いる人々の中にまじつていゝるのである。ゆえに、宇治の大君と中君はかつて述べたように、悲劇は悲劇ながら至高の幸いを追求しえたものといわねばならないのである。そこに源氏物語作者が時代の様相をしっかりと認識しつゝ、その上に立つて彼女たちのロマネスクを創造していることに思い到るのである。

朱雀院の女三の宮、女二の宮、宇治の三姉妹にきざまれた命題の意味、それはすなわち源氏物語主題論の重要な部分であるが、それを考究していく上でわたくしとしては本稿のごとき手さぐりが必要とするのである。

明石中宮の女一の宮の人生がこれら悲劇のヒロインとの対極にある意味はなかなか深いのではあるまいか。作者は新しいとか古いことという問題とは別に女一の宮のような生を皇女の理想としていたのであるまいか。わたくしにはどうしてもそのように思える。暗い人生を生きる人々の陰画が物語の局面局面の主題だとすれば、その一方に大きくひらけている女一の宮の人生にこめた作者の思いをわたくしは思わずにいられない。

光源氏一族としての女一の宮の幸福。光源氏の宿運と明石一族のそれとの契合によって成り立つ栄華の象徴としての女一の宮の存在は皇女独身の王権的復古であるのか。物語の作りあげた光源氏的王権体制の現実の神聖の象徴なのであるか。いずれにしろ皇女の独身たることの栄光が、重苦しく結婚せざるをえなかった皇女の物語の対極として輝いていることは確かなのである。

注1 今井源衛氏「女三の宮の降嫁」「文学」昭和三十年六月号。のち「源氏物語の研究」未來社刊所収。

注2 拙稿「宇治の大君と中君」「平安文学研究」昭和五十一年六月号。「宇治十帖後半部悲劇の構造」「中古文学」昭和五十二年十月号。のち「源氏物語作中人物論」笠間書院刊所収。

注3 拙稿「源氏物語第三部の主題と構造」「源氏物語その文芸

的形成」大学堂書店昭和五十三年九月刊所収。のち「源氏物語の主題と方法」桜楓社刊所収。（大阪教育大学教授）